

主論文の要約

沖縄県八重山諸島における「学校芸能」の創造と展開に関する研究

氏名 呉屋淳子

本論文は、民俗芸能を創造する「場」としての学校に着目し、現在、八重山諸島石垣島の県立高校で展開されている民俗芸能の創造とその継承過程を通して、民俗芸能を創造・継承する主体としての学校の機能と役割を明らかにするものである。

八重山芸能の成立は、近世琉球期の琉球王府による先島統治にまでさかのぼる。先島とは、琉球王府の支配下にあった宮古・八重山諸島を指している。1609年、島津氏の琉球侵略によって薩摩藩の支配下に置かれた琉球王府は、薩摩との関係を維持するために先島統治を強化し、八重山諸島に王府の役人を常駐させる制度を布いた。王府から派遣された役人たちは、島の政治を監視しただけでなく、宮廷芸能、つまり琉球古典芸能を島々に持ち込み、のちにそれを島の人々にも伝授した。そのことによって、従来、無伴奏だった八重山諸島の歌には楽器の伴奏が付けられ、八重山諸島の踊りには宮廷舞踊の所作が加えられた。その影響を受けて、島々で育まれた歌と踊りは近代を通じて八重山の民俗芸能として成立し、展開してきた。

1879年の廃藩置県によって琉球が「沖縄県」になり、新しい時代を迎えるなかで八重山諸島の民俗芸能は、舞台芸術を意識した鑑賞用の民俗芸能へと展開していった。そして、八重山諸島の人びとの歌や踊りに対する感覚や嗜好が変化した結果、新たなレパートリーを加えるなど、新しい民俗芸能が生み出された。同時にこうした変化は、八重山諸島の人々が琉球古典芸能との関わりを常に意識しながら、独自の芸能として八重山芸能を創造していく過程でもあった。

1972年の沖縄本土復帰以降には、より地域の独自性を強調した八重山芸能という独自の芸能が確立されてきた。このような動きに敏感に反応したのが、学校であった。特に、戦後につくられた八重山諸島の高校では、1960年代から郷土芸能クラブが創設され、今日に至るまで活発な活動を続けている。八重山諸島のすべての高校では、民俗芸能が地域と切り離されて教授されてきた訳ではなく、むしろ地域社会と密接な関わりを保ちながら、新たな芸能が生み出されていた。そして、そこで生まれた新しい芸能も地域社会に受け入れられていた。本論文では、学校と地域社会が相互に関わりながら新たに創り出される民俗芸能を「学校芸能」として定義し、民族誌的なアプローチを試みた。ここでいう「学校芸能」は、次のような特徴をもっている。

まず、学校と地域社会の相互作用を通して新たな民俗芸能が創造されている。八重山芸能は、八重山の地域の人々によって継承されてきたが、近年は学校のなかでも八重山芸能

が教えられるようになっている。特に、学校で高校生たちに芸能が教えられる過程に注目すると、地域社会で育まれてきた八重山芸能が、学校と地域社会の関わりなかで新たに創り変えられ、「学校芸能」という新しい芸能を生み出している。

そして、他の地域の民俗芸能や国の文化政策など、さまざまな影響を受けながらも、地域社会の文脈のなかで展開している。特に、「学校芸能」が演じられる機会が、文化庁による施策の影響を受けた舞台を中心としているため、演じられる場や条件によって「学校芸能」に変化が見られる。

さらに、学校を主体とする八重山芸能の教育は、地域の民俗芸能の継承者を生み出している。学校独自の新しい民俗芸能を創り上げるためには、地域の民俗芸能を学び、それを観察することも重視されている。地域社会の文脈で行われている民俗芸能を「見る」という行為を通して芸能を学び、さらに、そこで学んだものを自分たちの演舞に生かしている。

八重山諸島は民俗芸能への親しみが根強いばかりでなく、「歌と踊りの島」というイメージから脈々と芸能が受け継がれている地域だとされてきた。しかし、その継承形態については、これまで明らかにされてこなかった。このような理由から、八重山諸島の高校で展開した郷土芸能部を主要な考察対象とすることによって、現代八重山諸島における八重山芸能の継承形態の実態と円滑な継承を可能にさせる構造を明らかにすることができると考えた。八重山諸島という限られた範囲ではあるが、琉球古典芸能に対置された八重山芸能が、学校で継承される過程を通して、民俗芸能の新たな継承形態を生成し、新たな民俗芸能を創造していく過程を捉えることができると考えている。

そこで、本論文では、まず、序章で民俗芸能の継承をめぐる先行研究を検討し、その問題点と課題を明らかにした。その際、民俗芸能研究における民俗芸能の概念の変遷について検討し、本論文における民俗芸能の定義を示した。そして、民俗芸能の継承をめぐる諸課題を整理し、本論文の主要な考察対象である「学校芸能」を民俗芸能研究のなかに位置づけ、近年の民俗芸能の継承形態に関する議論について検討した。

1章では、八重山の地理と歴史を概観した。特に、近世琉球期の八重山において、琉球や薩摩の人々が八重山にもたらした芸能やその背景について把握し、それ以前の八重山の芸能とどう関係していたのかを確認した。そして、近代以降、八重山芸能の成立と展開について示した。さらに八重山が、沖縄県の一部として沖縄戦を経験し、米軍統治期や日本本土復帰を経る過程でどのような立場に置かれていたのかについて検討し、八重山と沖縄の間に生じる関係性を明らかにした。

2章では、八重山において八重山芸能が成立した過程について述べた。特に、八重山芸能と呼ばれる芸能体系が古くから存在していたのではなく、琉球古典芸能との接触を通じて生まれてきたものであったことを示した。そして、特に戦後、沖縄との差異が八重山の人々に意識されるにつれて、知識人を中心に八重山独自の芸能として創り上げられたものが現在「八重山芸能」と呼ばれる芸能であったことを明らかにした。さらに、このような八重山芸能が学校に取り込まれ、「学校芸能」として創造される過程を、沖縄固有の芸能教授シ

システムである「研究所」との相互作用の過程から明らかにした。

3章では、八重山芸能を創造・継承する主体としての学校に着目した。特に、1964年に八重山諸島の高校で八重山芸能クラブの立ち上げに関わった教員の経験の聞き取り調査を通して、学校における八重山芸能の導入と定着について考察した。そして、学校で八重山芸能が教えられるようになった背景を、沖縄県高等学校教職員組合や琉球大学八重山芸能研究会の活動の事例を通して明らかにした。

4章では、「学校芸能」の創造とその展開を明らかにする手がかりとして、学校と地域社会、全国高等学校文化連盟および沖縄県高等学校文化連盟、そして文化庁の4者間の関わりに注目し、全国高等学校総合文化祭の開催が高校生の文化活動、特に郷土芸能部の活動に与える影響について考察した。その際、全国高等学校文化連盟の設立と全国高等学校総合文化祭が開催されるに至った経緯について整理した。そして、沖縄県高等学校文化連盟の設立と地方大会である沖縄県高等学校総合文化祭および沖縄県高等学校郷土芸能大会の実態について検討した。沖縄県高等学校郷土芸能大会に参加する生徒や教師、そして地域社会の相互に関わりながら「学校芸能」が創造される過程を通して、高校生の文化活動に与えるコンクールの影響力について明らかにした。

5章では、近年の『高等学校学習指導要領』改訂に伴う教育課程の編成に注目しながら、八重山芸能の指導者や授業内容を検討し、教育課程で行われている八重山芸能の教育の特徴について述べた。特に、八重山芸能の教育は、八重山芸能の基本を学ぶことが重視され、それを身に付けさせる点に特徴があった。また、琉球古典芸能と比較しながら学習が行われていることから、正規の教育課程でも八重山独自の芸能の習得が重視されていることを明らかにした。さらに、八重山諸島の高校では、クラブ活動（あるいは部活動）だけでなく、教育課程のなかで八重山芸能の教育の機会が提供されていた。つまり、それは、学校が八重山芸能にこだわった教育を目指していることを示している。これらの検討を通して、八重山における「学校芸能」の創造と展開に、正規の教育課程が関係していることを明らかにした。

6章では、八重山諸島の高校の郷土芸能部で行われている「学校芸能」の創造と展開について考察した。郷土芸能部の生徒たちは、自分の演舞が地域の人々から「見られる」存在であることを意識したことによって、地域社会から認められる八重山芸能の担い手を目指すようになった。また、このような彼らの意識は、地域社会の文脈のなかで行われる民俗芸能を積極的に学ぼうとする状況に顕れていた。これは、高校生たちが八重山芸能の演じ手であるからこそ、地域社会で行われている八重山芸能を「見る」ことが重視されていた。このように、八重山諸島の高校の郷土芸能部の活動は、八重山芸能の演じ手を育てていると同時に、八重山芸能を「見る」側も育てていた。言い換えると、民俗芸能の演じ手を育てることでは、「見る」側を育てることができない。このような点に、民俗芸能を創造・継承する学校の役割があることを指摘した。

終章では、結論として、民俗芸能研究においてほとんど注目されてこなかった学校の機

能と役割の検討を通して、学校を民俗芸能の継承形態の 1 つとして捉える必要性を指摘した。そして、「学校芸能」が創造されながら展開される過程を通して、学校が地域の民俗芸能の継承者を生み出し、さらに、それが民俗芸能の継承に与える可能性について述べた。